

おわりに

きちっと学んで実践を

カウンセリングを学びだした頃、講師自らが公開授業をする「構成的グループエンカウンター」と称する研修に行ったことがあります。そのとき、円の中を動いて相手を見つけてジャンケンし、勝ったら順番に座っていくという場面がありました。気の弱そうな子どもが一人オロオロとしていて、結局最後まで座れないでいました。私はその子がかawaiiそうだったので、「ペアを決めるのに仕方がないのかなあ」と思っていました。

そのうち、やっとその子も座ることができたのですが、その途端、講師が「もう一回」と言ったのです。その子は泣きそうな顔で、また最後までウロウロするはめになりました。

すると、ジャンケンに勝って座っていた力のありそうな子が、「おい〇〇、こっちに来いよ。ジャンケンしてやるわ」とあざけるように声をかけました。そのとき講師は、こともあろうに「ほら『ジャンケンしてやるわ』って言われてるぞ」と、「グズグズするな」と言わんばかりにその子を急き立てました。

今なら「それ、おかしいやろ」と割って入れると思うのですが、その頃は私も情けないことに初学者だったので、その指導の意味を質問することしかできませんでした。「あれでクラスの問題が浮き彫りになったのだ」という答えでした。そんなこと、研究授業で改めて明らかにしてもらわなくてもよいことですし、後から考えると講師がそういった学級風土を促進していたのです。

その後、何度も「本物の」エンカウンターの研修に参加しましたが、その講師を見かけることはありませんでしたし、参加者に聞いても誰も彼を知りませんでした。きっと、何か他のことを学んで「エンカウンターも同じよう

なものだろう」という思い込みで講師をしたのではないかと思います。

このようなことを防ぐには、講師を招く側にも見識が必要です。県の研修で「その人は教育相談をやっていたの？ 今も仕事は違う部署じゃなかった？」という指導主事が事例検討の研修を担当し、参加者が混乱したという話もありました。

また、先生方が行うカウンセリングで私が気になることは、ソーシャルスキル教育にしろエンカウンターにしろ、「パパッと資料を読んで、パパッとやってみる」安易な取り組み方をする先生が少なくないことです。笑い話ですむくらいの失敗ならまだしも、陰で泣いている子どもがいるようでは、やらないほうがましです。

何事もきちんと学んで実践することが基本ですし、それができてから人に伝えることが大切です。私が「教えることで自分自身が一番学べる」と言うのは、きちんと教えられるレベルまで自分を高めることが前提です。「適当な勉強でも、他の先生に伝えているうちに上手くなる」ということでは決してないことを強調しておきます。

もちろん、学ぶときは「よい師」を選ぶことが、肝心です。

自己投資して学び続けよう

この本は、教員が学校で使えるカウンセリングを効果的に学ぶための入り口と、そこを入ったあたりをお示しすることが目的です。この本で紹介した以上のことは、やはり講師と対面で学ばれることをお勧めします。

学ぶ目的をしっかりと持つことができたなら、忙しい仕事や生活のやり繰りをして、休みの日に身銭を切って「本物」に触れて学ぶことが重要です。そういう意味で、私はエンカウンターを國分康孝先生に、選択理論心理学を柿谷正期先生に、ソリューションを森俊夫先生にと、「当代随一」の方に学べたことは幸運でした。ここまでやってこられたのも、「日本にこれ以上の人はいない」と言われる超一流の師に学べたことが大きかったと思います。

共に学び続けましょう

國分先生は「何事も10年間、真剣に取り組めばモノになる」と教えてくだ

さいました。10年間を過ぎた頃、確かに「少しはモノになってきた」という気持ちを得られるようになりました。そして、幼少の頃のあこがれであった大学の先生になることもできました。

とは言え、私が思い描いていた「学校で活かすカウンセリングを極めた大学の先生」には届いていません。いまどきの大学の先生って、意外に多忙なのです。私は、授業を大切にしたいので、講義の準備に時間が結構取られますし、大学でも「校務分掌」と似た仕事がいっぱいあって、カウンセリングを「極める」ことになかなか時間が回せないのです。この本の改訂を新たな起点として、学びを深めていこうと誓っています。

以前、1年しか教えることができなかつた函館大学の学生たちに「申し訳ない」と謝ったことがあります。そのとき彼らは「我々は先生の教え子だということを誇りに思っている」と励ましてくれました。その声は、今でも聞こえてきて、私をシャンとさせてくれます。

関西国際大学時代の教え子には、再会したときに「二度と我々の前から消えないでください」と言われました。その声を受け止めて「教育カウンセリング心理学研究会」という名の勉強会をつくりました。2012年に始め、今でも月1回集まって、エンカウンターやソーシャルスキル教育、キャリア教育、事例検討、ロールプレイ、読書会などの企画で研鑽を積んでいます。

この本は、当初、不登校やキャリア教育、効果的な事例検討などについても触れたかったのですが、紙幅の関係で割愛せざるを得ませんでした。現在、研究会の仲間と、子どもたちの幸福な人生の実現を後押しするために、エンカウンターとソーシャルスキル教育を系統的に組織した新教育プログラムの「キラキラプログラムⅠ」を作成、実施しながら効果測定を重ねています。また、キャリア教育プログラムである「キラキラプログラムⅡ」の運用も始めていますし、学級会・HRを活性化させる目的の「キラキラプログラムⅢ」、いじめ等のスペシフィックな課題に取り組む「キラキラプログラムⅣ」の作成にも取り組んでいます。学会発表も一緒にやったりして、カウンセリングを学ぶ仲間の成長する姿と共にあることに生きがいを感じます。

生きることは、互いの思いを受け止めながら歩み続けることだと、出会った先生や教え子の言葉を噛み締めています。そして、「共に学び、共に生き

る」ことを教えられ、幾分かは実践できてきたかと思っています。

今でもへこたれそうになることが多い私ですが、挫けそうになっても「ここで終わりじゃない。今に見とけよ」という気合が出て来るのが、「いい年をして」と自分でも頼もしいというか可笑しくなります。そして、「このファイトって、カウンセリングを勉強したおかげだな」とニッコリしているのに気づきます。

読者の皆さん、お読みいただきありがとうございます。これからも共に学んでまいりましょう。研究会に興味のある方は、下記にご連絡ください。

kirapro12@gmail.com

感謝

「自分の学びと実践を本にする」という大望をかなえてくれた上に、改訂版を出せるまでにこの本を育ててくれた、ほんの森出版の皆様にお礼申します。

そして、私のカウンセリングの師である先生方や一緒に学んでくださっている教育カウンセリング心理学研究会の皆さんにお礼申し上げます。

最後に、「教育委員会を退職し、大学教員をめざしたい」と相談したときに、「決めたら、サクサク進め」と勇気づけてくれた私の配偶者と、独立独歩で育っていく心温かい4人の息子たちに感謝を捧げます。